令　和　３　年　度
宮崎国際大学　教育学部
総合型選抜（第５回）

試　験　問　題
【小　論　文】

受　験　番　号
氏　名

小論文　教育学部

問題

次の二つの文章は、新聞に掲載された「人間と動物の関係」をめぐる記事です。この二つの記事を読んで、あなたは「人間と動物の関係」の在り方をどう考えるか、子どもたちに「動物との接し方」をどう教えていきたいと思うか、６００字程度で述べてください。体験を交えて書いてもかまいません。

動物への愛情って？

徳山奈帆子さん（京都大学霊長類研究所助教）

大型類人猿の研究者で、アフリカのコンゴ民主共和国でボノボ、ウガンダでチンパンジーの長期調査をしています。常に「愛情をもって」彼らを観察しますが、彼らは私を認識してはいても、近づいてきたり、親愛の情を見せたりすることはありません。その必要がないからです。

研究者には当然ともいえる野生動物とのかかわり方について、広く発信したくなった出来事が最近ありました。

３月末に亡くなった志村けんさんの追悼として、動物バラエティー「天才！志村どうぶつ園」（日本テレビ系）で過去の映像が流されました。

同番組は絶滅危惧種や保護犬の問題も扱うものの、視聴者に一番人気なのは志村さんとチンパンジーのパン君、プリンちゃんの仲の良さです。

番組では、チンパンジーに人間のようなふるまいをさせる演出が長年、行われています。研究者や動物園関係者らでつくるＳＡＧＡ（アフリカ・アジアに生きる大型類人猿を支援する集い）は、絶滅危惧種であるチンパンジーのエンタメ利用や幼少期に母親と離す扱いに対する批判声明などを過去５回出しました。

テレビ局は今回、パン君の演出映像を大量に放送しました。志村さんに対する哀惜の念が、本来生き方の異なるチンパンジーと人間が「仲良くできる」「愛しあえる」といった感動にすりかわり、視聴者に偏った動物観を植え付けるのではないか。ツイッターにそんな懸念を書き込んだところ、多くの共感が寄せられました。

一方で、「志村さんは心から愛していた」「演出で何が悪い」という意見もありました。でも、チンパンジーの身になって考えてみて欲しいのです。彼らは群れで暮らし、仲良しもライバルもいて上下関係もある社会的動物です。子ども時代は群れのルールを覚え、仲間との絆を形成する大切な時期です。寿命は約 50 年。親から離され、人間と仲良く 10 年を過ごしても、残りの 40 年は仲間の元に戻れず孤独に過ごすことになります。

１万年以上前から人間と共生関係をつくってきたイヌとは、全く事情が違うのです。野生動物も子どもの頃は人間が母親代わりになれるかもしれませんが、多くは成長すると一般の人には扱えなくなります。

昔、アニメで人気があったアライグマをペットにした人が手に負えず遺棄し、外来種問題に発展しました。最近はカワウソがＳＮＳで人気ですが、希少動物飼育のブームの陰には密猟問題もあります。

動物との関係が、ペットブームの延長で考えられがちです。「かわいい」は人間勝手な気持ちです。動物を本当に愛するということは、人間本位の愛情を押しつけないことでは

ないでしょうか。

（令和２年６月２日　朝日新聞　聞き手・中島鉄郎）

志村園長　最後の〝宿題〟　プリンちゃん　大縄飛び成功

新型コロナウイルス感染による肺炎で３月末に 70 歳で亡くなったタレントの志村けんさんと、テレビ番組を通して交流があった観光施設「阿蘇カドリー・ドミニオン」（熊本県阿蘇市）の宮沢厚園長（60）とチンパンジーのプリンちゃん（４歳）が、志村さんからの最後の「宿題」をやり遂げた。

６月初旬、施設の動物ショーに登場したプリンちゃん。キックスケーターや竹馬を見事乗りこなし、大トリで初披露したのは大縄跳び。約 20 回無事に跳び終えると、観客から拍手（はくしゅ）が湧いた。宮沢園長は「志村さんは技が完成したことを知らない。きっと空の上で見てくれているでしょう」と観客に語りかけた。

「次のロケでは縄跳びをやらせてみたいんだ」。２月の収録後、志村さんから宮沢園長に電話があった。プリンちゃんは練習を開始したが、上手にできないまま３月 26 日のロケは中止に。しばらく興味を示さなかったが、宮沢園長らが近くで縄を跳んでみせると没頭し始めたという。

２００４年から始まった番組「天才！志村どうぶつ園」で、志村さんはチンパンジー「パンくん」と娘のプリンちゃんとともに全国各地をロケで回った。16 年の熊本地震後は、阿蘇の復興に貢献したいと、月１回ほどロケで施設を訪問していた。

（令和２年６月７日　宮崎日日新聞）

令　和　３　年　度
宮崎国際大学　教育学部
総合型選抜（第６回）

試　験　問　題
【小　論　文】

受　験　番　号
氏　名

小論文　教育学部

問題

次の文章は、学校教育における美術教育の在り方について、新聞社が千葉大学の神野真吾氏に取材したものです。神野氏が指摘する美術教育の問題点とは何か、また、氏の言う「美術で教える教育」とはどのようなものか、を説明し、あなたは「学校教育における美術教育」はどうあるべきだと考えるか、600 字以内で述べてください。

千葉大准教授　神野真吾氏

「ものの見方を変えられることが、美術の大きな価値の一つです」。多様な文化や考え方がぶつかり合う現代社会で、その学びを応用できる教科であるにもかかわらず、こうした視点が教育現場に十分浸透していないと、神野准教授はみる。

学校で学ぶ美術は長年、色彩や造形が重視され、「上手な」作品を作らせることが目的とされてきたといわれる。「先生にセンスがいいと言われた子ども以外は、美術を自分には関係ないものと思ってしまうのではないでしょうか」

日本では、画家や彫刻家らが率いた「作り手中心主義」とも言える美術教育の歴史があり、作品を鑑賞することがなおざりにされてきたと解説する。鑑賞は、作品の良さを味わうだけでなく、自分で批評し、新たな意味や価値を見いだすことでもある。この学びが現代ではますます重要になっているが、教師にもそのような鑑賞法を学ぶ機会は少ないと指摘する。

こうした現状に対し、神野准教授は、知識や技能の習得を重視する「美術を教える教育」から、作品鑑賞など創作だけではない美術活動を通じ、他にも生かせる能力を身に付ける「美術で教える教育」への転換の必要性を訴える。

鑑賞は従来、学習指導要領で学習領域の一つだ。だが、実際には子ども同士が自らの作品について意見を言い合うだけのケースもあり、「教室内の人間関係が反映され、本当に感じたことを言えず、あまり意味がない」と疑問視する。

神野准教授は美術館やアーティストと連携し、小中学生の鑑賞プログラムなどを実践し、その中で「アート的思考」を育むプロセスを意識してきた。具体的には、作品を見た際の「感性＝感じたこと」を出発点に考えを深め、創造的な活動（アクション）へと結び付けられるようなプログラムで、日常の多様な場面に応用できるという。

特に重視するのが、自分が見て感じたことと客観的に見えることの区別だ。両者の比較で、自分の見方のバイアス（偏り）に気付き、異なる解釈ができるようになる。そういった積み重ねこそが、複雑な社会を生き抜く武器になると神野准教授は説く。

「ものの見方の更新は、世界を見るレンズを増やすことでもあります。それは他者への共感につながり、世界との関係性を変えます」